ウェズレー・C・ミッチェルの ベンジャミン・マカレスター・アンダーソン２世批判

齋　藤　宏　之

Ⅰ　制度学派とアンダーソン

ベンジャミン・マカレスター・アンダーソン２世（Benjamin McAlester Anderson, Jr., 1886-1949）は，ミズーリ州で政治的・文化的に著名な後裔である．ミズーリ大学で文学士，イリノイ大学で文学修士，コロンビア大学で博士号を取得した．その博士論文が『社会的価値』（*Social Value*）であった．経済学者の間で受け入れられ，1911年にはコロンビア大学の専任講師に就任した．そうこうしているうちに，『社会的価値』はハート・シャフナー・マルクス賞を勝ち取り，1913年には助教授に昇格した．その直後ハーバード大学からの申し出を受け入れ，1918まで助教授を務めた．同年ミシガン大学で正教授の職を与えられたが，その申し出が届く前に，ニューヨークの全米商業銀行の経済顧問として就職した[1]．２年後にチェース・ナショナル銀行と合併した後も，引き続き新銀行のエコノミストとして留まった．1939年にはカリフォルニア大学ロサンゼルス校で再び教授した．コロンビア大学ではジョン・デューイ（John Dewey）の教え子であったし，フランクリン・H・ギディングズ（Franklin H. Giddings）を熱心に聴講した．チャールズ・H・クーリー（Charles Horton Cooley）の研究，取り分け『社会組織』（*Social Organization*）を賞賛した．ジョン・ベイツ・クラーク（John Bates Clark）の『富の哲学』（*The Philosophy of Wealth*）や『富の分配』（*The Distribution of Wealth*）にも感銘を受けた．またソースタイン・B・ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen）の様々な著作も高く評価した[2]．

アンダーソンは，社会的価値学派の代表者と目され，社会心理学の考えを経済学に適用しつつ，社会的要因すなわち制度を重要視して，価値は制度の影響を受けると捉える．欲望は行動・感情の

---

1)　アンダーソンの1918年頃の心境を記述するのに，エドウィン・セリグマン（Edwin R. A. Seligman）宛ての手紙をジョゼフ・ドーフマン（Joseph Dorfman）は紹介している．

「ここ３，４年，私に確信させたことは，銀行家・株式仲買人・企業家と楽しく効果的につきあっていける能力が私にはあるということである．さらに確信させたことは，ウォール街の人々は，私が会った一団の誰と比べても，経済的事実と経済的傾向をめぐる科学的事実に興味をもっているということである．……惑わされない人，つまり真実を本当に欲する人を相手にすることは心を爽快にする．そういう人は仕事柄真実を必要としているからである．」Joseph Dorfman, *The Economic Mind in American Civilization*（New York: Augustus M. Kelley, 1969）, Vol. 3, pp. 419-420.

2)　Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*, Vol. Ⅱ（New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969）, p. 452; J. Dorfman, *op. cit.*, Vol. 3, pp. 416-420.

アンダーソンは，ジョゼフ・A・シュムペーター（Joseph A. Schumpeter）の著『経済発展の理論』（*The Theory of Economic Development*）を書評する際，こう述べている．

「経済学者はあまりにも長い間静態理論に満足してきた．そしてシュムペーターやヴェブレンのような著作は，経済生活をこれまで以上に理解することにとって意義あることばかりである．」B. M. Anderson, Jr., “Schumpeter's Dynamic Economics,” *Political Science Quarterly*, Vol. 30, No. 4, December, 1915, p. 660.

支配的思考習慣から生ずるとする．その結果絶対価値は社会状況が決めるとみるに至る．

制度学派もまた，制度は支配的な思考ならびに行動様式を具体的に表現し，個人の好みや価値観を作るように作用すると考える．個人は，思考・行動様式の支配を受けて育つからである．それゆえ経済行動は，それが埋め込まれている社会状況に基づいて説明する必要がある．こうして制度がいかに重要であるか強調する．ヴェブレンはこう述べる．

「個人の行為は，集団内での自身と仲間との習慣的関係が束縛し方向づけるばかりでなく，これらの関係は，また制度的性格を帯びているので，制度状況が変化するにつれて変化する．欲望・欲求，目的・意図，方法・手段，個人行為の広さ・動向は，制度的変数の関数であり，その変数は，極めて複雑で完全に不安定な性質を帯びている[3]．」

同様にウェズレー・C・ミッチェル（Wesley Clair Mitchell）は，傾聴に値する見解を次のように披瀝する．

「社会的概念は社会制度の核心である．社会制度は世間一般の思考習慣にすぎず，これが行為を導く規範として世間に受け入れられている．この形で社会概念は，個人に対して長年の慣行により認められた一定の権力をもつ．ある社会集団に属する成員全てが社会概念を毎日使用することは，知らぬ間にこれらの個人に形を与えて共通パターンを作る．独創的に活動することを望む人の進路に一定の障害物を差し挟むこともある[4]．」

この主張に照らし合わせれば，社会学的考え方を援用しつつ制度が重要であるという観点から，制度主義者が社会的価値学派をどう捉えているか考察することは，社会的価値学派との関連で制度学派の思想的特徴を明確に描き出すという重要な研究課題に直接的に繋がってくるといってよいであろう．

翻って制度派経済学は，19世紀末から20世紀初頭にかけて合衆国で現れた．経済への制度的接近の起源はヴェブレンの研究に求められる．ヴェブレンの影響を受けたミッチェルは，国家経済研究所（National Bureau of Economic Research）の初代所長となったし，ミッチェルの教え子であるサイモン・クズネッツ（Simon Kuznets）は，国民所得計算を発展させた．ジョン・R・コモンズ（John Rogers Commons）とその門下生たちはウィスコンシン大学で労働研究を行った．さらにジョン・モーリス・クラーク（John Maurice Clark）の教え子，モーリス・コープランド（Morris Copeland）は資金循環勘定を発展させた．レックスフォード・G・タグウェル（Rexford Guy Tugwell）はフランクリン・D・ルーズベルト（Franklin Delano Roosevelt）のブレーントラストの一員となり，ニューディール時代の経済政策に関与した．

こうして1930年代にかけて，制度派経済学はアメリカの大学の経済学部に強力な影響を及ぼすに至った．しかしながら「1944年までには，……当時の制度主義の大物，クレアランス・エアーズ（Clarence Ayres）は，新古典派の主流派が制度主義の接近方法に対して勝利を得たことを認め[5]」，制度学派の影響力は衰え始めた．数学的処理・計量経済学・ケインズ派経済学に対する熱狂に圧倒されてのことであった．それゆえ制度主義が，現在，経済分析に及ぼす影響力は強いとはいえないであろう．しかし制度学派は，ワレン・サミュエルズ（Warren Sammuels）が述べるように，「……存続しているし，たとえ盛況でない

3) Thorstein Veblen, *The Place of Science in Modern Civilization and Other Essays*（New Brunswick: Transaction Publishers, 1990）, pp. 242-243.

4) Wesley C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part II," *Journal of Political Economy*, Vol. 18, No. 3, March, 1910, p. 324.

5) Alan Hutton, "Institutionalism: Old and New," in *Encyclopedia of Political Economy*, edited by Phillip Anthony O' Hara（London: Routledge, 1999）, p. 532.

にせよ悪いとはいえない[6].」実際のところ，ヴェブレン，コモンズ，ミッチェルらの研究を重視しているサミュエルズ，ジェフリー・ホジソン（Geoffrey Hodgson），マーク，トゥール（Marc Tool），ウィリアム・ダガー（William Dugger）らの研究業績には目を見張るものがある．

また制度主義の見地からこれまでの経済理論の核心において，理論的水準にせよ応用的水準にせよ制度的内容が欠如していると捉えれば，制度派経済学と既存の経済学との興味深い関連もみえてくるのも事実である．実際のところこの点を意識してマルコム・ラザフォード（Malcolm Rutherford）は研究を進めていることが，その論文「制度派経済学――当時と現在――[7]」（“Institutional Economics: Then and Now”）から窺い知れる．マーティン・シュービク（Martin Shubik）が一般均衡理論を「概念の拘束」と呼んだ批判[8]は，性質上制度学派がいわゆる正統派理論に行った批判に近い．またハロルド・デムセッツ（Harold Demsetz）が主張する政策評価に対する「比較制度」接近[9]は，制度主義運動の背後に潜む要因と密接な関わりをもつ．

さらに現代の経済学には，ラザフォードによれば，制度主義の伝統の一部であったテーマを論じているものもある．例えば，経済学をより妥当な心理学理論に移行させるための様々な努力，ゲーム理論が所与の制度状況のモデルを作ることと社会因習の進化の問題に注意していることは，制度主義者の同様な試みを想起させる．財産権をめぐる最近の研究は，制度主義者の見方の中核にあった論題を追い求めている．取引費用の概念は，制度主義者の文献の一部には潜在していた．法と経済学は，制度主義者が以前に開拓した領域に関与している．企業金融・エージェンシー理論・企業支配における最近の研究は，所有と支配の分離に関するアドルフ・バーリ（Adolf Berle）とガーディナ・ミーンズ（Gardiner Means）らの制度主義者たちの先駆的研究を自らの出発点としている[10].

このように制度学派は，現代の経済生活の最も重要な現実がもたらす結果を解釈したり予測したりするうえで強みを見せている．それゆえ制度学派をめぐる研究には依然として現代的価値を見いだし続けることができる．

翻ってアンダーソンの経済思想は，既存の研究で意を尽くして十分に論じられてきたとはいえない．制度主義者のなかでもアンダーソンを取り上げた経済学者は皆無に近い．この状況において制度学派の経済学者であるミッチェルの著『経済理論の諸類型――重商主義から制度主義まで――』（*Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*）のなかでアンダーソンを中心的に論じている所説を見いだすことができる．すなわち同上書のなかの第17章「社会的価値学派――ベンジャミン・マカレスター・アンダーソン２世――[11]」（“Social Value School: Benjamin McAlester Anderson, Jr.”）である．そこでミッチェルがアンダーソンの思想をどのように捉えているのかに焦点を合わせて考察していくことを通して，制度主義の本質的特徴を浮かび上がらせたいと考えている．この点をめぐる先行研究に対して一定の貢献が期待できるからである．章を改めてミッチェルのアンダーソンに関わる所説を逐次

6) Warren J. Samuels, “Institutional Economics after One Century,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 34, No. 2, June, 2000, p. 305.

7) Malcolm Rutherford, “Institutional Economics: Then and Now,” *Journal of Economic Perspectives*, Vol. 15, No. 3, Summer, 2001, pp.173-194.

8) Martin Shubik, “The General Equilibrium Model is Incomplete and Not Adequate for the Reconciliation of Micro and Macroeconomic Theory,” *Kyklos*, Vol. 28, No. 3, August, 1975, p. 545.

9) Harold Demsetz, “Information and Efficiency: Another Viewpoint,” *Journal of Law and Economics*, Vol. 12, No. 1, April, 1969, p. 1.

10) M. Rutherford, *op. cit.*, pp.186-187.

11) W. C. Mitchell, *Types of Economic Theory*, Vol. Ⅱ, pp. 447-484.

みていくこととする．

Ⅱ　アンダーソンの社会的価値論

ミッチェルは，経済理論の社会的価値の類型を理解するには，社会心理学がどのように生じたか知っておかねばならないという．社会的価値学派は，社会心理学から得た教訓を経済学に適用しようとしたからであった．そしてミッチェルによれば，社会心理学者は個人心理学は存在しないという．ミッチェルはこう述べる．

「社会は，人間性の旧来の見解を支持すると，一連の様々な単位の構成要素となる個人の総計にすぎないとみなすのが通例であった．社会はこれを構成する人々の単なる総計に留まらないという考えは，ほとんど遭遇することはなかった．経済学者が慣れていた見解は，社会の富は社会の様々な個人の資産を合計したものにすぎないということであった．経済学者は，……それゆえ国の富を増大させる適切な方法は，万人に自分自身の利益を追求させ，こうして自身の資産をできるだけ自由に増大させることであるといった．丁度それと全く同様に，経済学者と政策作成者が取った見解は，各人はある種独立した原子ということである……[12]．」

けれども心理学には，社会心理学以外存在しない．個人は誰でも，成長する際，まわりの人々の影響を受けて，現在の自分になるからである．まわりから学習し，どのように考え，感じ，活動するか，その習慣を身につける[13]．

20世紀になってようやく，厳密な意味での社会心理学が誕生した．社会心理学者は，ジェームズ・ミル（James Mill）からジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill）やヘンリー・シジウィック（Henry Sidgwick）に至る一連の偉大な功利主義思想家が抱いた人間性ならびに社会政策の見解の諸相に反対することで注目を浴びた．人間を快楽主義的に概念化することに反発した．

ミッチェルは，上述の考えに影響を及ぼした研究者を指摘する．まずクーリー[14]である．もともと社会学者であり，現代心理学に精通している．世間一般の行動習慣を社会学の見地から説明しようとする．その後ウィリアム・マクドゥーガル（William McDougall）の著『社会心理学概論』（*Introduction to Social Psychology,* 1908）が出版される．社会科学を研究する場合，心理学の基本的概要が与えられるべきだと考えた．さらに重要な研究者はグレアム・ウォラス（Graham Wallas）であった．近代の政治的経験の心理学的要因を研究することに関心をもっていた．魅惑的かつ啓発的な著作が2冊ある．『政治における人間性』（*Human Nature in Politics,* 1908）と『大社会』（*The Great Society,* 1914）である．デューイも，人間性と，人間と社会との関連について新しい見解を展開した．ヴェブレンは，社会の心がどのように形作られ発展するか理解することに貢献している．考え，感じ，そして活動する習慣がどのように累積的に変化するか心理学的見地から研究している．

ミッチェルは，「これは，全て，経済学の理論の社会的価値の類型を議論する準備のためであ

12)　*Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 447.

13)　*Ibid.*, Vol. Ⅱ, pp. 447-448.

14)　デイヴィッド・ハミルトンは，クーリーについてこう述べている．

「チャールズ・クーリーが『鏡に映る自己』を用いて非常にうまく説明したように，人間行動は社会的行動であり，個人の人格や習慣的パターンの蓄積は，特定の社会環境が生み出す．運動インパルスは活動を生じさせるが，この活動の特定の様式は文化環境に依存している．

この思想は，人間性の概念に関する限り，画期的であった．」David Hamilton, *Evolutionary Economics: A Study of Change in Economic Thought*（New Brunswick: Transaction Publishers, 1991）, pp. 44-45.（佐々木晃監訳，佐々野謙治，塚本隆夫訳『進化論的経済学――経済思想における変化の研究――』多賀出版，1985年，62ページ．）――なお，訳文は必ずしもそれによったわけではなく，私の自由に訳している．

る[15]」という．この類型は，変化の理論を経済学的に立てる際，その含意を，人間性と人間行動を概念的に解釈する過程で理解する．そこでフランク・A・フェッター（Frank A. Fetter）が代表する類のアメリカ心理学派の研究を非難する．行動するうえで制度が及ぼす要因に注意していないからである．欲望を方向づける条件を十分に説明していない．効用理論家は，ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ（William Stanley Jevons）ばかりでなく，アメリカ心理学派を含め，「なぜ人々は特定の品物を重視するか，つまり需要表がどのような要素に基礎を置いているかほとんど説明しようとしない．社会的価値理論家はその問題に取り組む．そうする際，制度が及ぼす影響力が極めて重要だと考える．つまり人間の欲望は，どのように行動し感じるか，これらの広範に流布している社会習慣から生ずるとみなす．そしてこれらの広範に流布している社会習慣は，社会的価値理論家たちが制度と解するものである[16]．」

ミッチェルは，狭義の社会的価値学派の代表者として，アンダーソンの研究に取り掛かる．

まずミッチェルは，アンダーソンの『社会的価値』（*Social Value,* 1911）と一般的な理論的問題により深く関与している『貨幣の価値』（*The Value of Money,* 1917）を取り上げる．『貨幣の価値』において特に重視するのが，『社会的価値』で説明した一般的，理論的体系を再検討する第Ⅰ編ならびにどのようにして静学と動学を調和させることができるか示す第Ⅳ編である．

ミッチェルは，アンダーソンの理論を他の類型と比較して特徴づけるものとして，「オーストリア学派の悪循環」，「絶対価値」，「評価の社会的要因」を挙げる．

ミッチェルは，社会的価値学派がオーストリア学派の価値論をめぐって行う批判，つまりアンダーソンのいう「オーストリア学派の悪循環」をみる．オーストリア学派によれば，ひとつの商品は価値をもつ．その商品と引き換えに，他の諸商品を得られるからである．他の諸商品も価値をもつ．他の諸商品は初めの商品と交換されうるからある．こうして循環する．その循環にまつわる悪とは，価値に基づいて価値を説明することである．

アンダーソンは，上述の悪循環を明確な形で示しているものとして，フリードリッヒ・フォン・ウィーザー（Friedrich von Wieser）の著『自然価値論』（*Der natürliche Wert*）を紹介する．ウィーザーによれば，自然価値は交換価値を形成することに寄与するが，「人間が不完全であること，あるいは罪過，詐欺，暴力，偶然も妨害する．別の面からいえば，現在の社会秩序においては，私有財産が存在すること，そして貧富の差が妨害する[17]．」

ウィーザーの上述の陳述を考慮して，アンダーソンが，その著『社会的価値』において示すことは，ウィーザーの見解では，自然価値は交換価値の形成に寄与することと，購買力が影響を及ぼすと述べることである．ミッチェルは，アンダーソンの主張をまとめる．

「……アンダーソンは主張する．ウィーザー類型の理論家によれば，自然価値を形成することに寄与する交換価値があり，そして自然価値を形成することに寄与する自然価値がある．ウィーザー類型の理論家は交換価値にまで再び戻る．もう説明はしない[18]．」

次にミッチェルは，アンダーソンの考える絶対価値の概念を明確にしようとする．アンダーソンが絶対価値という実体が存在するのを確信している理由を解明する．

「交換価値をもつなら，それが意味するに違いないことは，２つの量の間に比率が存在することであり，また２つの量が実在するのを心に留めて

15) W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. Ⅱ, p. 451.
16) *Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 451.
17) Benjamin McAlester Anderson, Jr., *Social Value* (Boston: Houghton Mifflin, 1911), p. 47.
18) W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. Ⅱ, p. 456.

おくに違いないことである．２つの量が価値の量であるに違いないのは確かであるので……ようやく比較することができる．心のなかで生ずる臆測的な価格オファーをどうしても想像するには，心のなかに２つの明確な量があることを認めなければならない．そうすればこれらの量は，その価格オファーで比べられるようになる．個人が２セントを夕刊に支払うというとき，これが論理的に暗に意味することは，独立した価値を２つもっており，ここにおいては，それらの価値を同等視しているに違いないということである．……全く明白である点は，２つの独立した価値はアンダーソンの見地からは価値に違いないことである．……人間の経済行為に動機を与える力をもつ要素として等しい．絶対的なものは絶対価値である．絶対価値は，アンダーソンがみるように，交換に先立って存在するに違いない[19]．」

アンダーソンが「オーストリア学派の悪循環」において強調したいのは，価格オファーに含められる比較は２つの絶対価値を比較するということである．考慮すべきは購買力ではなく，個人の心に存在する絶対価値である．

ミッチェルは，絶対価値が個人の心のなかに存在すると考えることが，交換に先立つかどうか，実例を挙げて確認する．1918年３月に欧米で物価が激しく上昇した事実である．この事実をアンダーソンはどのように理解するか，ミッチェルは説明する．

「……価格がなぜ上昇したか理解するには，理論家は，現在金につける価値と商品につける価値とを対比し，これを，戦前金につけた価値と戦前商品につけた価値と比較しなければならない．一方では，金の価値がどのように変化するか説明がついた．金の価値は相変わらずかなり安定している．他方では，商品の価値がどのように変化するか説明がついた．商品の価値は金の価値と比べはるかに高くなった．価格上昇は，２組の価値の比率が変化したことを示しているだけである．これは，常に，アンダーソンにとって絶対価値とは何であるかをかなりはっきりさせている．またいかなる類の目的に対して，その術語を用いるかもはっきりさせている[20]．」

ここでアンダーソンは社会的要因を重視する．価値評価は多数の現存の社会的要因が影響を及ぼす．つまり，経済的，倫理的，政治的制度である．

近代，経済生活が実際どのように発展するか理解するには，価格の背後から先行する絶対価値にさかのぼらなければならない．また個人の心のなかにあるこれらの価値を理解するには，自分が属する社会状況を考慮しなければならない．個人の絶対価値は社会状況が決める．各人の心のなかにある絶対価値は，自らが育った社会状況が生み出すのがほとんどである．個人は，同一共同社会に属する成員である限り，社会が生み出す[21]．

ミッチェルは，人間の意識を一定の文明水準で理解しなければならないとし，次の見解を提示する．

「知性は，社会が生み出すのがほとんどであるから，人間が生まれる世界は，神経単位間の結合部を前もって多く形作っている．その結合部は，生まれた時点ですら，若干の明確な反応をする準備があることを示している．生まれながらに，また，神経単位間を新たに結合することができる．どのように結合するかは，有機体としての経験が決定するのが主である．取り分け他人との経験のなかで，知性を形成することに結びつくとそうである．結果として，誰であれ，誕生したときから，その心は，極めて文字通りの意味で，厳密な生理学上の意味ですら，親兄弟，少し後には，接触するようになる子供や大人が形成するようになる．学校では，このように接触するのをさらに拡大させる．こうして子供は，６歳だろうが８歳だろうが10歳だろうが，何歳であれ，成長する際，そ

19) *Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 460; Cf. *Ibid.*, Vol. Ⅱ, pp. 465-466.

20) *Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 463; Cf. *Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 469.

21) *Ibid.*, Vol. Ⅱ, pp. 464-466.

のまわりにいる人たちが作り上げるのが普通である．自身の価値体系は，知性が生み出すもののなかのひとつである．心を形成する一部分である．また社会的要素を特徴としている．その要素は自身に影響を与える．その点，知性の他の部分に影響を与えるのと全く同様である[22]．」

絶対価値は，アンダーソンがみるように，実体のない論理的抽象概念である．絶対価値が存在してようやく相対価値の観念が存在すると考えることができる．論理的な根拠は，相対価値は比較の意味を含み，また比較するものが存在するに違いないことである．ミッチェルはこう述べる．

「論理的に重要な考えがある．すなわち，個人は量を２つもち，それらの量を比較しているのは，特定のものと引き換えにどれほど与えようか決定するときであるに違いないという考えである．こう考えても筋は通っている．ただし，人間の心が，実際のところ，計算機でなければならない．……相対価値は絶対価値に先立つ．ただし，絶対価値のようなものがいやしくも存在していなければならない[23]．」

続いてミッチェルが関心を寄せるのは，アンダーソンがどのようにして静学と動学を調和するか，その方法を提案する点である．

アンダーソンの考えでは，貨幣尺度を経済量の公分母として持ち出すときは，静態問題を抱えているのが常である．貨幣尺度は，差し当たり，不変とみなすことができる．量に適用できる不変の尺度があるなら，問題を静態の問題として示すことができる．静態と動態を調和させるには方法が２つある[24]．その方法をミッチェルはこう説明する．

「アンダーソンの議論では，動態要因それ自体が貨幣に基づいて述べることができる限り，理論家は動態問題を静態問題に同化している．例えばアンダーソンの主張によれば，ヴェブレンは貨幣価値をどのようにして変動量につけることができるか示した．例を挙げると，利潤の予想，信用，金である．動態要因であるのは確かである．そしてひとたびドルやセントに換算して述べると，動態要因は静態分析の一部分となりうる．これが調和させるひとつの方向である．

方向がもうひとつある．要因が通常の静態問題の一部分となり，この静態問題がドルやセントに換算して述べられると，それらの要因のなかには，それ自体変化を受けやすいものがあることを認めるものである．……理論家は，貨幣価値を動態要因につけることによって，この動態要因を静態問題のなかで扱うようまとめることができる．……別の面からいえば理論家が見いだせることは，自身の静態問題を綿密に徹底的に検討することが可能なら，貨幣に基づいて述べることができる要素のなかには，変化するものもあることである[25]．」

さてミッチェルは，アンダーソンが J. B. クラークを通して直接経済理論に触れた点に着目する．J. B. クラークは，経済問題を静態と動態の見地から考察する．これらの術語を力学から取り入れた．しかしこれらの術語が役立つのは，ミッチェルの考えでは，経済生活と経済問題を概念上機械論的に解釈する場合である．アルフレッド・マーシャル（Alfred Marshall）のように経済問題を生物学的にみると，静態と動態を区別してもそれ程重要ではないし，静態と動態を調和させる必要性もあまりない．アンダーソンは，このような見地から思考習慣を身につけた後は，デューイらの影響を受けるようになり，若干異なった見地から考え始めているとミッチェルは捉え，次の見解を披瀝する．

「……アンダーソンは，最近様々な影響力を受けて前進している．これは，これまで考えていた古い範疇と，漸次心のなかで作り上げている新しい目標を調和させようとする形で現れている．こ

22) *Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 467.
23) *Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 472.
24) *Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 475.
25) *Ibid.*, Vol. Ⅱ, pp. 475-476.

のことによって，アンダーソンは，奇妙な妥結状態に陥っている．アンダーソンの古い見解に特有の名残がある．この名残は，特に，絶対価値の概念である．デューイから学んだプラグマティックな見解とほとんど相容れない．また名残となっている考えとして，経済学を前進させるのに行わなければならないことは，経済学の2つの大きな亜門を調和させる何らかの方法を見いだすことである．つまり，静態と動態である[26]．」

如上の諸点を受けてミッチェルの展開する所説によれば，アンダーソンは，行為は社会的諸力が規定することを重視する．客観的な行動形態を用い，心の内部の主観的過程を説明する．この絶対価値に基づいて価格理論を構築する[27]．

ここでミッチェルは，1918年3月26日付のアンダーソンに宛てた手紙を通して，アンダーソンの研究，取り分け方法論の評価を試みる．ミッチェルは，物価が戦争勃発後激しく上昇した理由を議論するには，関与する時間過程を研究しなければならないという．つまり過程は錯綜しているから，まず錯綜状態にある要素に取り組み，次いで必要な抽象化を行う[28]．

そしてミッチェルは，絶対価値には本質的なものは何ら見いださない．アンダーソンが絶対価値に達するのは，心理学的分析によるのではなく，厳密な論理的推論によると捉える．この推論は妥当である．ただし心が推論過程において論理的でなければならない．さらに心理学的事実において，絶対価値は相対価値に先立つことは証明できないと述べる[29]．

しかしながらミッチェルは，統計学上の側面でアンダーソンの意義ある貢献を認める．莫大な量の投機売買を例証していることである．「この種の研究は，ほぼ『絶対価値』をもつといってよいくらいなので，その術語をほとんど認めたくなる[30]」と述べる．

ミッチェルは，アンダーソンの絶対価値をめぐって，次の見解を披瀝する．

「はっきりいって私は，術語『絶対価値』の無難な解釈と，『貨幣の価値』の7ページからの引用した部分を調和させることができない．『価値は交換比率の背後にある．そして交換比率を決定する原因となる．現在の目的にとって重要なことは，価値は交換関係に先立つことに注意しさえすればよい．価値は絶対量であり，経済学者の多くが述べるように，完全には相対的ではない．交換比率は相対的であるが，相対的なものの背後に絶対的なものが存在するに違いない．』私がみる限りでは，『絶対的なもの』は，『相対的なもの』の背後に置くと，それ自体，組織的な関係となる[31]．」

ミッチェルは，アンダーソンに対するヘンリー・W・スチュアート（Henry W. Stuart）の批判に注目し，それは自らが述べたことを別な様式で解釈していることであると捉え，こう述べる．

「……スチュアートは，『与件』に起因するのが明確な比率であるとすると，個人の心にある2つの『絶対価値』を『与件』として強調することに異議を唱える．それどころかスチュアートは，現実の過程に，ある特定の対象をめぐる感情とその他の対象をめぐる感情との間で常に互譲しているのを見いだす．『絶対価値』は，交換全てに先立って存在しているので，交換比率は決定しない．それどころか特定のものの価値は，明確には認められない．認められるとすれば，ただ，『価値が』心の過程において，他の特定のものの価値に『関連づける』以外ない．価値評価の循環過程のなかで便宜的に休止する場において，それゆえ『絶対的なもの』を『相対的なもの』によって説明しなければならない．この点，『相対的なもの』を『絶対的なもの』によって説明するのと全く同じであ

26）*Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 477.
27）*Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 479.
28）*Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 481.
29）*Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 481.
30）*Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 481.
31）*Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 482.

る[32]．」

ミッチェルは，オーストリア学派の悪循環が依存する誤った抽象化を棄却することによって，その悪循環からいかにして逃れるか，アンダーソンの立場を次のように説明する．

「１．存在するのは，個人の心ではなく，社会の心だけである．２．社会の心のなかでは，一連の経済価値はばらばらではない．……価値とは何か．『原動力の量，つまり人間活動を支配する力の量であり，対象に具体化している．』その量は社会が生み出す．特に影響を及ぼすのが社会制度である．この制度は，経済的・政治的・倫理的秩序をもっている．では価値をどのように説明するのか．『社会生活・精神生活という現実の統一体に』戻ることによってである．『そして取り分け分配の道徳的・法的価値に』戻ることによってである．絶対価値は相対価値の背後にあるに違いない．価値は存在してようやく比較することができるに違いない．それゆえ様々な人の感情を比較することができる．社会の要因が価値評価を決定するからである[33]．」

ミッチェルは，アンダーソンの経済思想について大要以上のような見解を披瀝してきた．次にミッチェルの所説を整理しながら検討してみることとする．

Ⅲ　アンダーソン思想の限界と制度主義思想の特質

ミッチェルは，社会的価値学派は，社会心理学を利用しようとしていると考えるから，まず，その発生過程をみる．その際特に注目する研究者が，クーリー，マクドゥーガル，ウォラス，デューイ，ヴェブレンである．この予備的作業を踏まえて，社会的価値学派の代表者として，アンダーソンを取り上げる．アンダーソンのいう「オーストリア学派の悪循環」に着目する．

本稿でみたミッチェルの所説を踏まえつつ，アンダーソンの考えを掘り下げていけば，アンダーソンはウィーザーにオーストリア学派の悪循環の最も明らかな事例[34]を見いだし，ウィーザーの所説を引き合いに出す．

「貨幣価値は交換する際の貨幣の主観的価値によって決まる．つまり貨幣と引き換えられる財の限界効用である．しかしこれらの主観的価値，限界効用は価格によって決まる．そして価格はひとつには貨幣それ自体の価値によって決まる．この循環は，あらゆる形のオーストリア学派の理論に存在している．オーストリア学派の理論は，限界効用を用いて価値ならびに価格の因果説明を求めるからである．……循環はかなり著しく目立っている[35]．」

アンダーソンによれば，限界効用理論は価値に基づいて価値を説明するから循環論法であるとする．価格体制を直接的に扱っている限り，循環性が関わるから，それを論理的に回避すべく，価格の背後から基本的概念である価値にさかのぼらなければならないと考える．それゆえアンダーソンは，社会的価値概念を「価格で表されているにもかかわらず，原因となる力であり，価格の背後にある[36]」という．ここにおいて比較を価格オファーにほのめかすと，絶対価値を比較する点を強調していると捉える．また絶対価値が個人の心のなかに存在すると考えることが交換に先立つとする．このことをミッチェルは，戦争勃発後物価が激しく上昇した問題をアンダーソンがどのように取り扱うか考察することを通して明らかにしていった．

かくしてアンダーソンの考えでは，個人の評価は価格を決定するので，社会的価値を表す．そして社会的価値は「社会の心」が定める．社会の心

32)　*Ibid.*, Vol. Ⅱ, pp. 482-483.
33)　*Ibid.*, Vol. Ⅱ, p. 483.
34)　Benjamin McAlester Anderson, Jr., *The Value of Money*（New York: The Macmillan Co., 1917）, p. 89.
35)　*Ibid.*, p. 89.
36)　*Ibid.*, p. 87.

は，個人が成長する際，そのまわりにいる人々が作り上げる．つまり人の心は，同一共同社会に属する成員である限り，社会状況が生み出す．社会の心それ自体が現れたものである．そして価値とは，原動力の量であり，ある対象が人間の動機を支配する力であり，その量は社会が生み出す．そこで「一握りの人たちの価値に及ぼす直接的な支配力がますます大きくなるのは，事物でも，特有であり，専門的に利用する余地があり，精巧かつ高価なシステムが共同することを必要とするものに接近するのに比例する．そして当然の成り行きとして，個人の移り気あるいは個人の意思決定が一切の価値に及ぼす影響力は，富と権力が集中するにつれ，ますます増大する．経済的社会価値は制度的価値であり，個人・階級・制度が取り分け評価し統制する[37]」し，「経済的価値の機能は，人間の経済活動を規制し統制することである[38]」ということになる．その結果，社会的要因，すなわち制度を重視して絶対価値を理解するに至る．社会心理学の考えを援用して，アンダーソンは価値は制度の影響を受けるとする．絶対価値は社会状況が生み出すとみる．しかしミッチェルの考えでは，アンダーソンの価値論の実体は論理的である．つまり個人は，特定のものと引き換えにどれほど与えようか決定するとき，量を2つもつという考えが妥当するには，人間の心が計算機でなければならないと捉えるからである．またこのようなアンダーソン理論の類型は，特に絶対価値の概念をめぐって古い見解の名残をもっていると考えた．

続いてミッチェルは静学と動学を調和する方法をみた．アンダーソンは，動態要因を貨幣に基づいて表現し，動態問題を静態問題に同化したり，貨幣価値を動態要素につけて，その要素を静態問題で処理したりするけれども，静態と動態を上首尾に調和させていないとミッチェルはみた．

これまでみてきたアンダーソンの経済思想の妥当性を，彼が用いる社会心理学や制度的事実の認識を把握することを通して，ミッチェルの思想を念頭に置きながら検討していくこととする．アンダーソンは，物価変動をめぐって金の価値は安定しているとみる．これは社会心理の事実であり，制度的性質を帯びている．しかしこれらの諸点をアンダーソンの社会的価値は無視している．このようにアンダーソンは，制度分析を十分に行っていないという観点からも，ミッチェルがアンダーソンの経済思想に対し批判的態度を取る理由を見いだすことができよう．事実ミッチェルは，本稿で取り上げたその所説では，アンダーソンがデューイからプラグマティックな見解を最近学んでいることを認めながらも，その具体的内容には言及していない．

アンダーソンは，ミッチェルのみるところでは，ニュートン流の機械論的論理を用いるから[39]，アンダーソンの社会的価値論は力学的であり，経済的均衡に深く関わる．ライオネル・ロビンズ（Lionel Robbins）が述べるように，「諸力が均衡するという考えは多くの科学に広く行き渡っている．しかしその考えが理論経済学において程重要な役割を演じているところはほとんどない[40]」と

37）*Ibid.*, p. 484.

38）*Ibid.*, p. 27.

39）ハミルトンは，その著『進化論的経済学』においてこう述べる．

「ニュートン主義は，人間研究の領域という領域に急速に広まった．社会哲学者がしきりに利用した．その称するところでは，ニュートンが自然界を分析したのと同じ方法と考え方で社会現象を分析する手段としてであった．」D. Hamilton, *op. cit.*, p. 19.（前掲訳書，29ページ．）

ハミルトンは同上書において同様にこうも述べる．

「変化は，累積的変化の進行中の無限定の過程とみなされるのではなく，固定した領域の内部での一連の断片的な機械的な活動である．これがニュートン学説であり，古典派経済理論〔アダム・スミス（Adam Smith）からジョン・M・ケインズ（John M. Keynes）までの経済学の主流〕のこの様相は，その理論にニュートン学説の風趣を添えている．」*Ibid.*, p. 69.（同上訳書，95ページ．）

40）Lionel Robbins, “On a Certain Ambiguity in the Conception of Stationary Equilibrium,” *The Economic Journal,* Vol. 40, No. 158, June, 1930, p.

いってよいであろう．論理的推論を重視し，機械論的に社会を解釈する．それゆえデイヴィッド・ハミルトン（David Hamilton）の以下の見解は傾聴に値する．

「……ニュートン主義は，18 世紀の思想全てに広まり影響を及ぼした．その思想に含まれていた道徳哲学から政治経済学は分離した．道徳哲学者たちは社会領域を支配する自然法を探し求めた．そのような社会組織の自然法は，自然法が及ぼす作用という点で，アイザック・ニュートン卿（Sir Isaac Newton）の力学や重力の法則に類似していると考えられた．かくして機械的で反復的な運動の概念は，ニュートン体系に特有であり，社会哲学者が社会現象を説明するのに立案した．……

極めて大きかったのは，この思考方法がもたらした影響力であったので，その影響力は初期の策定者ばかりでなく，現在の策定者の経済思想全体をも支配した[41]．」

同様にグレン・アトキソン（Glen Atkinson）はこう述べる．

「18 世紀までに物理学や数学におけるアイザック・ニュートンの説得力のある重要な研究は，神学・哲学・政治学に及ぶ多くの分野において知識人たちの想像力をかきたて，物理的秩序・変化の世界観を作り出した．この世界観は啓蒙運動の基礎を築いた．啓蒙運動では，神の秩序・神の法が自然的秩序・自然法に取って代わられた．物理的世界，またその意味が拡大されて社会的世界は時計仕掛けであった．そこでは機構内部の変化は絶え間なかったけれども，構造はもとのままで不変であった．社会科学のうち，この見解は経済学に最も堅固に埋め込まれたし，今日でも相変わらずそうである．実のところ，ハンス・リンド（Hans Lind）の最近の主張によれば，経済学の学派は，この見解を用いれば認められる方法をもつのが常である[42]．」

ミッチェルの考えでは，経済学は哲学に起源をもち，その名残を強く留め続け，哲学的様式に倣い，観察ではなく一般情報に基づいて推論を行う[43]．ニュートンの後を継いだジョン・ロック（John Locke），トマス・リード（Thomas Reid）や理神論哲学者，そしてスコットランド常識哲学者らの思想の系統に沿っているといえよう[44]．ハミルトンが述べるように，「……経済学は，進化論的諸概念がほとんどの人たちの知識の一部となるずっと以前から，すでに完成した科学であった．それゆえ起源も伝統も，経済学という科学は進化論的ではなかった[45]．」経済機構の内部には神の秩序あるいは自然の理法という伝統的経済学のもつ先入観に基づき，正常状態とみなされる均衡が存在する．アンダーソンも一連の仮説に基づいた説明を考案し，各機能を分離する[46]．出発点ならびに到達点は均衡であり，その均衡において相互反応は果てしのない循環を気にかけなくなる[47]．「……経済的な変化は均衡からの乖離と均衡への復帰の運動にすぎない[48]」し，「この自然の調和の状態を攪乱できるのは外的諸力だけであるが，調和的均衡はすぐに回復される[49]」と機械論的に考

194.

41) D. Hamilton, *op. cit.*, p. 118.（前掲訳書，163～164 ページ．）

42) Glen Atkinson, “Common Ground for Institutional Economics and System Dynamics Modelling,” *System Dynamics Review*, Vol. 20, No. 4, Winter, 2004, p. 276.

43) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism,* Vol. Ⅰ (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1967), pp. 28-31.（春日井薫訳『経済理論の諸形態』第一分冊，文雅堂銀行研究社，1971 年，46～50 ページ．）

44) Cf. John Herman Randall, Jr., *The Making of the Modern Mind: A Survey of the Intellectual Background of the Present Age*（Boston: Houghton Mifflin, 1926), p. 261.

45) D. Hamilton, *op. cit.*, p. xix.（前掲訳書，xviページ．）

46) B. M. Anderson, Jr., *op. cit.*, p. 418.

47) *Ibid.*, p. 115.

48) D. Hamilton, *op. cit.*, p. 120.（前掲訳書，166 ページ．）

49) G. Atkinson, *op. cit.*, p. 277.

える．それゆえミッチェルは，絶対価値には本質的なものは見いださない．アンダーソンは，経済は必然的に均衡に向かうと考え，過程を発展的とはみなさないから，過程における機能の発展現象や相互依存を論ずることはない．制度全てを社会的価値という範疇に集約しつつ，横断面に考えを集中する．すなわち経済がどのように機能しているか断面的にみた．換言すれば，経済の横断面を動態的過程の見地との関連で分析していない．因果関係における変化が社会経済的現実の本質であるにも関わらず，それゆえ経済は累積的に変化しているにも関わらず，その変化過程は考察していない．したがって制度の変化を累積的因果関係に基づいて論じていないから，過去，現在，未来をもつひとつの過程[50]としての制度を満足に解釈することができないとミッチェルはみる[51]．ひいては制度的構造の内部での個人活動も，またこの活動が制度構造に及ぼす累積的変化も説明できない．人間を，体制を累積的に変化させることができる能動的原動力と捉えられないからである．

このようにミッチェルは，その独自の制度主義の見地から，「理論が用いてきた経済問題を発見する一般的方法，理論が提供してきた証明の論理的性格，理論が導き出した結論の利用の仕方，方法と結論が受けやすい限界[52]」をみた．その結果，アンダーソンの経済理論の説明は，如上のような制約を顕著に被っている以上，ミッチェルにとってもはや魅力的な研究対象とはなり得ない．ミッチェルは，その立場からアンダーソンは制度分析を行っているとは捉えていない．このミッチェルのアンダーソン経済思想への批判的接近に基づいて，社会心理の事実や制度の帯びる本来の性質に鑑み，論理的に推論し，社会をニュートン流の機械論的に解釈することを退ける．このいわば「ミッチェルのアンダーソン論」からも，経済を累積的に発展するひとつの過程とみなし，この動態的見地を念頭に置きながら，経済の横断面を考察するという制度主義を制度主義たらしめる，その思想の根底に一貫する堅固な特徴を確認することができる．

50）　Wesley C. Mitchell, “Human Behavior and Economics,” *The Quarterly Journal of Economics,* Vol. 29, November, 1914, p. 37.

51）　累積的因果関係の概念を制度分析に初めて適用したのは，ヴェブレンといってよいであろう．ヴェブレンは次の見解を披瀝する．

「個人は，自らの過去の経験によって生み出される．この産物は，既定の一団の伝統・因習的形式・物的環境のもとで累積的に練り上げられており，過程における次の段階への出発点を与える．個人の経済生活史は，手段を目的に適応させる累積的過程である．その適応は過程が進行するにつれて累積的に変化する．行為者もその環境もどの時点についても過去の過程から現れる．」T. Veblen, *The Place of Science*, pp. 74-75.

52）　W. C. Mitchell, *op. cit.*, Vol. Ⅰ, pp. 33-34.（前掲訳書，53ページ．）